

かな書きか 漢字書きか

年内にも内閣告示される改定常用漢字表では、200字近くが増える。これを前に去年、放送文化研究所では、全国の高校3年生1万1,000人を対象に漢字が読めるかどうかの調査を行った。新しい漢字表で、訓読みの和語では、「羨ましい」「剥がす」「立て籠もる」など正答率90%前後以上の語が増える。その一方で「弄か 遡る 綻びる」など正答率50%以下の難しい読みの語も増える。最近、放送文化研究所が行った、放送の表記についての視聴者やNHK職員を対象とした調査からは、読めても読めなくても和語は「かな書き」を好む傾向がうかがえる。漢語のために生まれた漢字を和語に当てる違和感のほかに、音節数が多い、字画数が多いなど複数の理由が関係していると思われる。上の語例を見ても読める読めないだけで、漢字がよい、かながよいと決めるのは難しい場合がある。

一方、音読みの漢語では、進捗、怨恨、遡上、山麓、真摯といった漢字が書けるようになる。これらは正答率30%以下の難読語だ。しかし、NHK職員を対象とした調査では、漢語は漢字のほうがわかりやすいという人が多かった。視聴者調査でも山麓、怨恨、真摯という難読語で漢字のほうがよいと答えた人が多かった。漢語は本来漢字で書く

ことばで、漢字表記が好まれるのかもしれない。ただ、使ってよい漢字であっても読めないならひらがなや交ぜ書きにする、あるいは読みがなをつけるという措置が望ましい。

放送文化研究所では、現在新しい漢字表にあわせた新用字用語辞典の改訂にとりこんでいる。職場で議論していて最近感じるのは、1つの語について漢字、かなのどちらが適切と考えるかは、各人の語感によってずいぶん違うということだ。

ひらがなで書く慣用があると思われる語や読み方が難しい語について、漢字で書くか、ひらがなで書くか、繰り返し議論した時期がある。数か月前のことだ。議論に疲れたころ、発想の転換なしに結論を出すのは難しいと悟った。

日本語は、1つのことばについて漢字、ひらがな、カタカナといくつも表記ができる数少ない言語の1つだ。

放送現場では、放送用語の表記は迷わないようにできるだけ1つにしてほしいという人がいる。その一方で多様な表記から選べるほうがよいという人もいる。どちらの主張も理解できる。両方の考え方のせめぎあいのなかで、出口を見つけるしかない、そう考えると視界が開けた。そして、議論は次の段階へ進んだ。が、今も山を一つ一つ越える日々が続いている。 吉沢 信(よしざわ まこと)